

平成 22 年度

南丹市行政評価推進委員会報告書

平成22年10月

南丹市行政評価推進委員会

目 次

1	はじめに	1
2	行政評価推進委員会	1
	(ア) 役割	1
	(イ) 構成	1
3	平成22年度外部評価の報告	
	(ア) 評価対象施策	2
	(イ) 開催状況	2
	(ウ) 評価の視点	3
	(エ) 評価の結果	4
4	3カ年の評価結果	9
5	3カ年の評価結果の総括	10
	(ア) 施策評価を実施して、特に指摘したい事項について	10
	(イ) 施策体系について	10
	(ウ) 施策と事業の関係について	11
	(エ) 施策体系内の事業間の関連について	11
	(オ) 外部評価の今後のあり方について	11
	(カ) 評価表の様式、記載内容等について	12
	(キ) 職員の取組姿勢等について	12
6	おわりに	14

1 はじめに

本委員会の外部評価の取組みは、総合振興計画に定める23施策のうち、1年目の平成20年度に2施策（12事業）、2年目の平成21年度に11施策（132事業）について外部評価を行いました。

最終年となる今年度は、前年度の取組みを踏まえ、10施策（268事業）を抽出し、市の内部評価に対し、妥当性、有効性、効率性などの観点から、外部評価を行いました。

そして、足掛け3年にわたり評価を実施してきましたが、この3カ年の総括も含めて報告書の取りまとめをしています。

2 行政評価推進委員会

(ア) 役割

市が行った内部評価について、施策の目的に照らし、施策に対する事業の貢献度を評価するとともに、総合振興計画の実現に向けた施策・活動となっているか、市民への説明責任を果たしているか、審議、評価し、改善すべき内容等を市長に意見及び提言を行います。

(イ) 構成

敬称略 五十音順

氏名	所属・役職等	備考
窪田好男	京都府立大学公共政策学部 准教授	
四方宏治	MAC京都公認会計士四方宏治事務所 公認会計士	委員長
谷口和久	明治東洋医学院専門学校 校長	
宮本三恵子	株式会社関西総合研究所 主任研究員	
村上幸隆	土佐堀法律事務所 弁護士 関西大学大学院法務研究科 教授	

平成22年7月末現在

3 平成22年度外部評価の報告

(ア) 評価対象施策

章 節	施策名	構 成 事業数	主管部局
第1章	生涯充実して暮らせる都市を創る		
第4節	医・食・住の充実と高齢者や障がいのある人の自立を支援する	106	福 祉 部
第5節	ふるさとで働ける場をふやす	7	農林商工部
第2章	自然・文化・人を生かした郷を創る		
第1節	豊かな緑と清流を守る	44	農林商工部
第2節	資源が循環するまちをつくる	23	市 民 部
第3節	南丹ブランドの「ほんまもん」をつくる	39	農林商工部
第6節	暮らしの安全と安心を守る	24	総 務 部
第4章	共に担うまちづくりの仕組みを築く		
第2節	住民自治の地域づくりを進める	13	企画管理部
第3節	多様な担い手のパートナーシップを育てる	4	企画管理部
第4節	大学等と連携し、ともにまちをつくる	2	企画管理部
第5節	未来を担う人づくりを進める	6	教育委員会

(イ) 開催状況

会 議	開 催 日	内 容
第1回 委員会	平成22年 8月 2日	<ul style="list-style-type: none"> ○ 平成22年度行政評価の取り組みについて ○ 平成22年度行政評価推進委員会の進め方について ○ 施策評価 <ul style="list-style-type: none"> ・資源が循環するまちをつくる ・暮らしの安全と安心を守る

第2回 委員会	平成22年 8月17日	○ 施策評価 ・住民自治の地域づくりを進める ・多様な担い手のパートナーシップを育てる ・大学等と連携し、ともにまちをつくる ・医・食・住の充実と高齢者や障がいのある人の自立を支援する ・未来を担う人づくりを進める
第3回 委員会	平成22年 8月30日	○ 施策評価 ・豊かな緑と清流を守る ・南丹ブランドの「ほんまもん」をつくる ・ふるさとで働ける場をふやす
第4回 委員会	平成22年 9月27日	○ 平成22年度外部評価の総括 ○ 平成22年度行政評価推進委員会報告書

(ウ) 評価の視点

評価は、施策ごとにヒアリングを行い、その中で質疑、意見交換を行いました。

評価に当たっては、次の「外部評価の視点」により、施策及びその施策に該当する事業を通じて、「優」・「良」・「可」・「不可」の判定を行いました。

外部評価の視点

区分	視 点	施策 評価	事業 評価
妥 当 性	・市民や社会の要求に合致しているか ・上位政策を達成するために必要な施策・事業か ・行政が関与しなければならない事業か	● ●	● ● ●
有 効 性	・市民の満足度は高いか ・成果指標値から見て、施策目標の達成度はどうか ・目的達成のための手段は有効か	● ●	● ●
効 率 性	・費用対効果の度合いはどうか ・それが最も効率的な方法なのか	●	● ●

(エ) 評価の結果

章	節	施策名	判定
第1章	生涯充実して暮らせる都市を創る		
	第4節	医・食・住の充実と高齢者や障がいのある人の自立を支援する	優
		〔内部評価の結果に対する意見〕 <ul style="list-style-type: none">・106事業は多すぎるので、先々、総合振興計画を立て直されるときに施策や事業の見直しをされるべきである。・これだけ多くの事業があると、内容が容易に解らないので、別途、こういう人を対象にこのような事業があるとか、施策内で方針ごとにこのような事業があるという資料が必要である。・生活での大体の困り事には、市が助けをしていると言えるぐらい、ありとあらゆるメニューがあるが、それを許容できる財政状況ではないので、今後検討が必要である。・施策・事業において非常に繊細なことが多くて、執行者から対象者へうまく伝えられているのかが大きなポイントである。・受益者負担でやればいい事業が、かなり沢山あるので、長い目で見て、自助・共助の方に軸足を移していくべきである。・大幅に事業の見直しを行う場合は、住民生活への影響が大きな分野なので、円滑に移行していく仕組みを丁寧に考える必要がある。見直しを集中的に考える枠組みも作る必要がある。・将来的には、保健・医療・福祉が集まって協働し、市民も参画して、そこで何か新しい枠組みや取り組みを生み出していく必要があると思う。・様々な施設が多くあるので、長い目で見て、それらを集約していくという発想と早めの政策決定が必要である。・厳しい財政状況の中で維持の方向で行くのか、ドライに縮小をかけていくのか、共助のような住民同士の助け合いという形にかえていくのか、市役所全体の政策的な判断をそろそろはっきりさせるべきである。・簡単に削れという考え方もあるが、そこでの雇用がどれぐらいあるのか、地域にどれぐらいお金が回っているのか、地域との連携がどれぐらい出来て、地域の活性化につながっているのか、ということはある程度把握していかなければならない。・市の関与の妥当性、重要度の基準で、こういった福祉サービスを自助、共助に移していくような政策転換を期待したい。・4町が合併してそれぞれ良いところを集めたら、これだけの事業になったが、住民に給付するものをできるだけ少なくして、最低限補償できる制度にもう一度見直す時期に来ている。・政策の優先順位付けを早くしないと中途半端に多くの事業はあるが、本当に必要	

な福祉サービスが残らなくなり、みんな満足しないという事態になりはしないか懸念される。	
第5節 ふるさとで働ける場をふやす	優
<p>〔内部評価の結果に対する意見〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今、住んでいる人たちの働き場所とか、あるいは卒業した人たちが、他に就職先が無くてこっちに帰ってきた時の働き場所等のフィールドに南丹市がなっておらず、コミュニティビジネス等の動きが見えない。 ・事業数が少ないのに、総花的な方針があるので、他の施策との役割分担があってもよい。 ・国や京都府も、住民や地縁団体が何かをやることに補助する枠組みを評価してきているので、市の方でうまく支援したら、出すお金や人手を減らしつつ、より大きな効果を上げられる。 	
第2章 自然・文化・人を生かした郷を創る	
第1節 豊かな緑と清流を守る	良
<p>〔内部評価の結果に対する意見〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法律で義務付けされたもの個別計画以外で市が独自で作成している個別計画は、評価の体系が整ってきている今、余程の必要性がない限り不要で、むしろ混乱を招く。 ・今後、「豊かな緑と清流を守る」活動をするのは行政やボランティア、NPO団体だけでなく、住民にもしていただけるようにする方がよい。 ・補助金等がなくなっても、「地域の人は、やっぱり頑張ってる動いている」という状況になるのか。事業の目標について合意形成ができているようには、この資料から感じられない。 ・美山だけの事業が目立っており、他の地域戦略を根本的に見直す必要がある。 	
第2節 資源が循環するまちをつくる	良
<p>〔内部評価の結果に対する意見〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農村環境公園等を存続させるのなら、活用方法として観光ツアーに盛り込み、観光客を引っ張ってくるなどもっと広域的に考えていくべきである。 ・農村環境公園、農村田園文化コミュニティセンターの運営について思い切った方針を出さなければならない。 ・火葬場の問題も合わせて抜本的な見直しを考えていく必要がある。 	
第3節 南丹ブランドの「ほんまもん」をつくる	優
<p>〔内部評価の結果に対する意見〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京ブランドの一部を担う南丹ブランド、美山ブランド、そして日吉ブランド等々のブランドの大まかな定義と名称の使い方を明確にし、また統一する必要がある。 	

- ・「ほんまもん」の南丹ブランドのものを発信していくという観点で、新光悦村の道の駅等でもう少し工夫の余地がある。市内の農産物などを調理したものがその場で即、食べられるようなものがほとんどない。
- ・有害鳥獣駆除で、結構大きな金額が動いているのにも関わらず、あまり目立って効果が無いということであれば、猟師の方をみんな集めて根絶やしにするとか、長期的にもつフェンスで囲うとか、抜本的な対策が必要である。
- ・京ブランドや美山ブランドのような全国区のようなブランドがある中で、あまり「南丹ブランド」にこだわる必要がないものもあるのではないかと、逆効果になっていないか、今後考えていく必要がある。
- ・担い手としての農家だけでなく、それをうまく販売する人をどう育て、支援していくのか、今後考えていく必要がある。

第6節 暮らしの安全と安心を守る

優

〔内部評価の結果に対する意見〕

- ・どういう災害を想定していて、どういう救援に役に立つのかということ整理して備蓄品目等を検討する必要がある。
- ・南丹市の過去の災害から、地震対策より水害、土砂災害の対策を優先すべきである。
- ・消防団の今までの活動や、過去の災害から培ったノウハウを十分に蓄積、継承できるように、その活動強化に対する事業を重点化すべきである。
- ・消防団活動において、今後、市民が活動を展開していく可能性が高いので、その活動に配慮した取り組みの強化が必要である。
- ・離れている地域に住んでいる方にもフォローできる安全・安心な緊急医療体制の体系整備が必要と考える。
- ・一般論としてこういう安心安全に対するメニューは必要と思うが、詳細に見れば削れるところがあると思うので、事業費を節約する努力が必要と考える。
- ・防災シュミレーションで、どういう災害が発生しそうなのか、どういうふうに対応するのかということ準備して、市民と情報共有する必要がある。
- ・自主防災組織が、今の状況でいつまでも続くとは思えない。今後は、消防署の体制強化や自治会などとの連携などで、組織が担う活動範囲や役割を見直していく必要がある。

第4章 共に担うまちづくりの仕組みを築く

第2節 住民自治の地域づくりを進める

良

〔内部評価の結果に対する意見〕

- ・地域ごとに色々な単位のコミュニティがあるだろうし、あっても良いが、市として地域コミュニティの単位を考えているのかという説明が抜けている。気持ちを一つにして何かやる中心となる地域コミュニティの考え方をしっかりと速やかに作りあげ

ることが必要である。

- ・地域の課題に対して、合併してこれだけ経っているのに旧町の壁をどんどん取り壊して良い方向に持っていくための動きが遅く、懸念を感じる。
- ・地域の方も、職員もやっぱり「これは課題ではないか」ということを、もう少し見える状態にして地域の方々に協力してもらえようような取り組みをする必要がある。
- ・将来に向かっての方向性が、合併してだいぶ経つのに、今一つ見えてこないし、一般的にスピードが遅い。

第3節 多様な担い手のパートナーシップを育てる

良

〔内部評価の結果に対する意見〕

- ・市民と共に担うまちづくり検討委員会の提言や実施計画の内容を反映させて、基本は、施策評価表を見たらわかるようにすべきである。
- ・広報で住民に「こんなことを発信した」だけでなく、こういう意見に対して「こんなアクションを起こしましたよ」「検討の余地があります」などの仕分けをしなければならないが、そういう作業が見えてこない。
- ・実施計画書を作ってそれで動くようなものではないので、様々な議論をしている段階で、職員の方が日参するぐらいに地域に入り込まないとこの事業は進まないのではないか。
- ・達人バンクは、市場があっても動かなかつたし、広報公聴の人数も少なくなっており、市民参加で何を期待するのかよくわからなかつた。
- ・条例や実施計画をつくれ、条件整備が整ったと言われた。今から具体的な展開をしていくことで将来を大変期待している。

第4節 大学等と連携し、ともにまちをつくる

可

〔内部評価の結果に対する意見〕

- ・交通の利便性向上などから京都市内の大学が入ってくる可能性はあるが、そもそも大学連携の主管部が美山支所という体制もそろそろ見直すべきである。
- ・市内にある大学等の学生が参加できるような具体的にターゲットを絞ったイベント等を考えるべきで、その延長線上で定住に結びつけば良い。
- ・学生にとって集中的に、卒業後のライフデザインとセットで働きかける仕掛けが必要である。
- ・大学サイド並びに、学生との連携、また学部の特長性を考えた形でまちと連携を図っていくという施策が大事である。
- ・期待する方向としては、市内外の色々な大学とかゼミとか研究室といったものが色々なコミュニティと結びつけられて、お互い勉強にもなるし地域も良くなるという関係がもっとできると良い。
- ・外部からのオファーのみで交流事業が成り立っているように思うので、市として、全体をコーディネートするような機関や積極的に活用を促す仕組み自体を持つ必要

がある。

- ・都市部の自治体と比べると、まだ大学連携に慣れていない感じがするが、今ある資源を更に活かしていく努力していただきたい。
- ・なんとなく大学が集まって、連携して、何か考えてくださいという投げかけをするよりも、大学に何をしてほしいのかを明確にして口説いてまわるほうが良い。

第5節 未来を担う人づくりを進める	不可
--------------------------	-----------

〔内部評価の結果に対する意見〕

- ・この施策の基本事業は、学校教育であるように思われるが、教育委員会の事業は少なく、施策と事業差がありすぎて解らない。
- ・事業だけをみるとその施策と事業との整合性が、整理出来ないし、理解し難いので、正当な評価がしにくい。
- ・他に入っていない事業を「ここに掲げました」という形になっているので、未来を担う人々のために何かオリジナルな事業を見出していきたい。
- ・南丹市が考える理想としての目標と事業のつながりがあまりにもかけ離れすぎて評価できないというレベルである。
- ・施策の目的や方向性と事業がバラバラで、抜本的な見直しが必要である。その見直しとして、施策をなくして構成事業をそれぞれ相応しい施策に振り分けるという方法と、この施策の4つの方針にあわせた事業を展開するという方法がある。

4 3カ年の評価結果

章	節	施策名	評価
第1章 生涯充実して暮らせる都市を創る			
	第1節	安心して子育てできるまちをめざす	可
	第2節	明日を担い、内外で活躍するひとを育てる	可
	第3節	生涯にわたって学び、活かす機会をつくる	良
	第4節	医・食・住の充実と高齢者や障がいのある人の自立を支援する	優
	第5節	ふるさとで働ける場をふやす	優
第2章 自然・文化・人を生かした郷を創る			
	第1節	豊かな緑と清流を守る	良
	第2節	資源が循環するまちをつくる	良
	第3節	南丹ブランドの「ほんまもん」をつくる	優
	第4節	ひとを温かく迎える	可
	第5節	伝統文化を継承する	良
	第6節	暮らしの安全と安心を守る	優
第3章 人・物・情報を高度につなげる			
	第1節	高速移動の網を広げる	不可
	第2節	鉄道をさらに便利にする	良
	第3節	安全で快適な主要道路でつなぐ	良
	第4節	誰もが安心な地域交通システムをつくる	良
	第5節	双方向の情報通信基盤をつくる	良
	第6節	にぎわいの市街地をつくる	良
第4章 共に担うまちづくりの仕組みを築く			
	第1節	共に生きるまちづくりを進める	可
	第2節	住民自治の地域づくりを進める	良
	第3節	多様な担い手のパートナーシップを育てる	良
	第4節	大学等と連携し、ともにまちをつくる	可
	第5節	未来を担う人づくりを進める	不可
	第6節	行財政改革を推進する	良

(平成20年度、平成21年度評価結果の詳細は、市ホームページに掲載)

5 3カ年の評価結果の総括

現在の大変厳しい南丹市の財政状況下で、総合振興計画に掲げるまちづくりを着実に進め、その実現のためには、今後この行政評価が形骸化することなく有効に活用されることが重要であると考えます。

そういった観点から、本委員会3カ年の外部評価を通じて感じたことを今後の課題として数点述べたいと思います。

(ア) 施策評価を実施して、特に指摘したい事項について

全体的に改革のスピードが遅く、4町合併時にあった旧町の事業や施策が、そのまま引き継いで実施されています。施策の目的に照らし、また費用対効果を検証して、事業の整理・統合・削減を急ぐことが必要と考えます。

〔委員会での指摘〕

- ・ 4町合併時に旧町ごとの事業や施設が今なお残っており、優先順位を考慮せずに評価したら、今回のような結果となるが、削ることができると思われる事業がたくさんあった。
- ・ 福祉分野の事業は非常に手厚くなっており、事業を整理することができるものもあるのではないか。
- ・ 施策のどこに重点を置いているのかわからない。
- ・ 提出された資料からは、事業の費用対効果が見えにくい。
- ・ 南丹市の中で、行政、民間、地域などにどう役割分担をしていくのか全体的な議論が必要と考える。

(イ) 施策体系について

総合振興計画の後期基本計画の策定にあたっては、施策体系を見直し、事業の効果、施策の目標の達成状況が評価できる単位に再構築することが必要と考えます。

〔委員会での指摘〕

- ・ 1つの施策の範囲が広すぎるものがある。
- ・ 予算規模や事業数が多すぎる施策がある。
- ・ 施策と事業が十分には結びつかない施策がある。
- ・ 南丹市の規模をふまえると、施策数を現状の23から40～50に分けるべきである。
- ・ 施策体系とそこにぶらさがった戦略計画がよく解らなかつたし、その事業計画の達成状況もはっきり解らなかつた。

(ウ) 施策と事業の関係について

現在のシートでは、施策と事業を1対1で整理されているため、施策として評価する場合に手段が不十分であるように見えるものがあります。複数の施策に関連する事業として意図されているものについては再掲して、目標と手段の関係を整理する工夫が必要と考えます。

〔委員会での指摘〕

- ・ ある施策の目標を達成する手段として整理されている事業が、他の施策の目標の手段となっていることもある。
- ・ 施策の目標を達成するため掲載されている事業が少なく、評価ができないものがあった。
- ・ 関連する事業の掲載の仕方を工夫して、目標達成への道筋をわかりやすくする必要はある。

(エ) 施策体系内の事業間の関連について

事業の優先度が明示されていますが、1つの施策の目標を達成する手段である事業が、複数の部局で実施されている場合、目標達成への道筋、それぞれの事業の進捗状況、課題、効果などを相互に共有し、目標達成のために中期的な戦略を立てて事業実施ができる体制づくりが必要と考えます。

〔委員会での指摘〕

- ・ 1つの施策に多くの部局が関わっているが、縦割り行政のため、課題や成果の調整が不十分となっているのではないかと。
- ・ 総合振興計画が総花的であるため、中・短期的な計画をしっかりと立てて、施策に結びつける必要がある。

(オ) 外部評価の今後のあり方に向けて

この3ヵ年で南丹市のすべての評価が完結したということではないので、今後も何らかの形で外部評価を継続していく必要があると思います。

〔委員会での指摘〕

- ・ やり方次第では、市民の委員も可能ではあるが、市民の参画とすると、かなりの時間を費やすことと、どうしても利益代表的な意見になる恐れがあり、大変難しい。
- ・ 当面の間は、一般的な市民の参画として市民意識調査を充実させていく必要がある。
- ・ 今後の外部評価の方法として、評価システムのコーチングをする役割と、施策・事業の妥当性について意見を聞く役割という2通りの役割を持って進めてはどうか。

- ・ 地域戦略的に地域自治を担う中核的な組織や人に対して議論を投げかけていく形での参画や評価を進めてはどうか。
- ・ 個人や家族という単位と広大になった南丹市との間を埋めるような公共活動の主体が今後、絶対必要となるが、その活動主体の整備をしつつ、施策などの評価に対して意見を投げ掛けるなどの方法もある。
- ・ 漠然と市民に参画してもらっても意見が言いにくいと思うので、議会とかJCとか今ある組織で外部評価をしていくというのもわかりやすい。
- ・ 本来、まちづくりというのは、議員を通して市民の意思が反映するシステムとなっているはずであり、市民参画は、ただのスローガン化しているように思える。

(カ) 評価表の様式、記載内容等について

行政評価の大きな目的の一つは、評価表を通じて、「わかりやすく透明性の高い行政運営」を目指し、「市役所の仕事ぶり」を見てもらうことにあると考えています。

この評価表が、市民にとって「わかりやすく」「納得のいく」ものとなるように、常に行政評価の目的を意識して評価に臨むことが必要と考えます。

〔委員会での指摘〕

- ・ 施策評価表の目的について、「どのようなこと」を「どうしたい」のか、もう少し具体的に書いていただきたい。
- ・ 今まで見せていただいた評価表の書き方、伝え方の優劣が激しく、今の資料では市民に十分な説明責任を果たしたものになっていない。
- ・ 事業活動記録について、「いつ」「どこで」「なにをしたか」は、最低限記載していただきたい。
- ・ 施策評価表の評価欄について、例えば「成果指標以外にこういう成果があった」などアピールをしていただきたい。
- ・ 個別計画と元々の総合振興計画が、時折、分離してしまうことがあるので、個別計画の内容は施策評価表に反映して、基本は施策評価表をみればわかるようにしていただきたい。
- ・ 国や府の補助金につかない南丹市独自にされている事業でどれだけ成果があげているのかを見る指標があっても良いのではないか。
- ・ 南丹市独自の視点から費用対効果の評価を見られるように工夫すべきである。

(キ) 職員の取組姿勢等について

3カ年の外部評価を終えて、職員の評価に対する姿勢が変わってきたと感じています。

これは、職員の意識の向上によるものと嬉しく思う一方で、評価に対する「理解不足」もあるのではないかと危惧するところです。

一見「良くできた評価表」となっているにも、ヒアリングにおいては、職員の危機感や、

改善・改革に対する熱意が伝わってこないところもあったように感じます。

今後は、常に市民の感覚を「感じ」、「意識し」ながら、コミュニケーション能力（説明能力）の向上を目指していくことが必要と考えます。

〔委員会での指摘〕

- ・ 評価表を作成している職員等の感覚に刺激を与えるやり方の一つとして、評価を議会にとりあげてもらって質問してもらうという方法もある。
- ・ 弁論の立つ課長の下にいる職員は、思考が停止してしまうので、若い職員に色々な場所で説明をする機会を与えていく必要がある。

6 おわりに

少子・高齢化の進展、情報化の進展や財政状況の悪化など、地方自治体を取り巻く環境は大きく変化しています。また、地域主権が進み、「地域のことは地域で」という自立した行政運営により、多様化・高度化する市民のニーズに応じていかなければなりません。

とりわけ地域主権の流れは、加速することが予想され、自らの財源を、自らの裁量で、自ら必要とする行政サービスを行うよう、行政運営のあり方を大きく転換するように迫られています。

そういった大きな変革の潮流の中で始まった外部評価の取組みは、本年で足かけ三年になります。この間には市役所を訪れる機会も多く、多くの職員の方と接することができましたことは、我々委員にとっても貴重な経験であり、大きな財産となりました。

多くの時間をかけた丹念な作業と、幾多の議論を経てまとめました本報告書が市民の方々並びに、南丹市職員の皆さんそれぞれに受けとめられ、生かされ、南丹市の行政評価制度がさらに充実、発展し、そのことによって総合振興計画に掲げる「森・里・街がきらめくふるさと 南丹市」の実現に役立つことを期待します。

最後になりましたが、評価の過程で対応いただきました担当者をはじめ、多くの関係者にご協力をいただきましたことに、委員一同感謝申し上げます。

南丹市行政評価推進委員会

委員長 四方 宏 治

委 員 窪 田 好 男

谷 口 和 久

宮 本 三恵子

村 上 幸 隆